

畫原理についての若干の論議をてんで無視してかかっており、ここで著者があげているソ連の計畫制度の缺陷(vgl. SS. 52-3)は思いつきとしか言えない程度のもので、問題にもならない。しかも、こういう種類の退屈な敘述をながながと讀まされたあとで、第2章の最終部、文字通り最終部で、「以上は戦前のことであるが、戦後も何等の改善がなされていないことはたしかである」という意味のことが書いてある(S. 54)のをよむと、思わず、表題をもう一度見直したくなってしまうのである。

缺點ばかり挙げているうちに、餘白がなくなつた。まだまだ澤山あるが、もうここいらで切り上げておく。批判ばかりしてしまったので、味も素っ氣もない書評になつてしまった程であるが、ドイツ語や英語だけでソ連經濟を研究しようという人のために、本書については、この程度の豫備知識がむしろ必要であろう。本書の中で若干なりとも利用しうる材料は、私の今後のポジティブな研究の中で使つて行くつもりである。したがって、ここでは省いておく。

(野々村一雄)

ジョーン・ロビンソン

『經濟學論文集』

Robinson, Joan: Collected Economic Papers.
Oxford, 1951. xii, 236 p.

この論文集はジョーン・ロビンソン夫人の學生時代(1922年入學)から最近にいたるまでの著作の内16篇の論文と9篇の書評(内未發表論文2篇)からなり、彼女の研究の諸段階に應じて5部に分類されている。30年の彼女の歩みをこの論文集によってあとずけてみよう。經濟學におけるケムブリッジの地位の故に、またケムブリッジ内において現實感覺に優れた彼女なるが故に、彼女の遍歴は彼女の高調な筆致と相俟って強い感銘と深い反省を與えている。

1920年代前期には、英國の輝かしい黄金時代はすでに去り、一部識者は暗澹たる前途を憂えたのであったが、なおその餘光は西天を薄紅に彩っていた。その餘光の中にマーシャル(1842-1924)の王座は揺るがなかった。彼女は當時をこう回想している。「マーシャルの原理はバイブルであり、われわれはそれ以上には何も知らなかった。ジェボンズ、クールノー、そしてリカードすら脚註の名前にすぎなかった。パレートの法則は聞いてはいたが、一般均衡の體系については何事も知らなかった。スエーデンはカッセルによって、アメリカはアーヴィング・フィッシャーによって代表されていた。オーストリ

ー、ドイツはほとんど知られていなかった。マーシャルが經濟學であった」(序文)。彼女は在學中にマーシャルの解説『美女と野獸』(第5部)を書いている。

1929年に彼女が母校に講師として歸った時「スラッファ氏の講義はわれわれの島國根性を追出しつつあった。彼女はマーシャルの矛盾を指摘するという演聖罪を犯しつつあった。年長者達はできるだけマーシャルを擁護して對抗した。しかし若い世代は彼等に説得されはしなかった。靜態的基盤と動態的上部構造との矛盾は餘りにも明らかとなった」(序文)。マーシャルの核心を靜態理論の論理體系に織込む努力を續けていたピグーに従って、彼女は『不完全競争の經濟學』(1933年)を發表した。『オイラーの定理と分配問題』以下6篇(第1部)はこの線にそう研究である。獨占の問題をひっさげて彗星の如く登場した彼女の成功はまことにめざましく、シュムペーターをして「ロビンソン夫人は賞讃すべき構想を立てることによって、彼女自身よきマーシャルリアンであることを示し、同時に優れて獨創的な經濟學者であることを示した」と激賞せしめた(『十大經濟學者』邦譯152頁)。

それにもかかわらず彼女は「この點に關して私は悪しき轉換をした」(序文)と告白する。現在の彼女にとって、微細な問題の優美な説明にふけり過ぎた靜態分析と理論からはおよそかけ離れた近代世界の不愉快な現實との距離は經濟理論の致命傷と見られるのである。彼女を獨占の問題から失業問題へ導いたものは14%(1921-38年平均)に及んだ失業率を生んだ恐慌と彼女の第二の師ケインズであった(p. 106)。

「1922年に貨幣の分野では數量説が優勢だった。現實の世界では失業は重くしい問題であったが、理論は失業にほとんど言及するところがなかった。1929年にケインズは『貨幣論』(1930年)の校正刷で講義していた」(序文)。翌年末に『貨幣論』が出版されるや、これをめぐって熱狂的論争がまきおこった。彼女は二つの高名な論文を發表した。その一つの『貯蓄と投資についての寓話』(*Economica*, Feb. 1933)はケインズ利潤論の解明を企てたものである(彼女によればこの論文は31年夏に書かれたとのこと)。他は『貨幣の理論と産出量の分析』(第2部)である。そこで彼女が「貨幣理論は最近激しい革命をとげた。それは貨幣の理論たることをやめて、産出量の分析となった」(p. 52)ことを指摘し、ケインズ自身彼が産出量の分析を書いたのだという事實を看過したと評する時、彼女は一般理論を先驅していたのである。クラインはこの二つの論文の意義を評價して「ロビンソン夫人は『雇用、利子及び貨幣の一般理論』の眞に

本質的な部分の説明を、極めて鮮かな筆致で誰よりも先んじて書いたのである。ロビンソン夫人によって書かれたこれら二つの論文がもっている理論的構造の相違は、實に驚くべきであって、われわれをして1933年のあいだにケムブリッジに革命が起ったのではないかと思わしめずにおかない」と書いている（『ケインズ革命』邦譯49—50頁）。1936年に『一般理論』が出版され、ケインズ経済學は傳染病の如く全經濟學者を感染せしめた。彼女は直にケインズの解説者として（『雇用理論入門』1937年）また展開者として（『雇用理論論集』1937年）筆をとった。

一般理論はケインズの長期的ヴィジョンを単純な模型によって裝備したものである。それはまず國際貿易の捨象として現われる。彼女はこの問題にケインズ的思考を適用して『國際貿易の純粹理論』（第4部）を書いている。この論文で彼女が後進國の問題にしばしば言及していることは興味深い。

また一般理論は短期靜態分析として現われる。このことによってシュムペーターの指摘するごとく「設備の創造と變化に附隨して起る現象のすべては、いいかえれば、資本主義過程を支配する現象のすべては考察から除外されることとなつている」とも解される（前掲書401頁）。しかしながらケインズは彼の理論の長期的問題への適用の端緒を『人口減退の若干の經濟的歸結』（*Eugenics Review*, 1937）において與えている。そうしてロビンソン夫人も彼にならって『イギリスの人口減退の經濟的歸結』（第3部）を書いて雇用、生活水準、貿易差額におよぼす人口減退の影響の分析をこころみた。

ケインズに導かれてここまで前進してきた彼女にとって、マルクスの理論體系、とくにその問題提起の正しさはきわめて魅力的であった。そうして彼女はマルクス経済學とアカデミック經濟學の離反はお互の大きな損失であることを痛感した。しかもマーシャル時代とは違って、「マルキストとアカデミック經濟學との關係は最近變化している。現時の諸情勢はアカデミック經濟學者をして獨占と失業という二つの問題に集中せしめた。アカデミック經濟學者は資本主義の長所に安住するよりもむしろその缺點を分析するように益々なってきた」（p. 133）。そうしてケインズ以後「アカデミック理論はマルクス體系に著るしく類似した位置に到達した。そうして今やはじめにマルキストとアカデミック經濟學者との間に討論を可能ならしめるに十分な共通地盤が現われた。こうした事情にもかかわらず、イギリスのアカデミック經濟學者による眞面目なマルクス研究はほとんど行われていない。政治的偏見を別とすれば、マルクスの無視は大部分マルクスの説明方法の極端な曖昧さによるものである」

(p. 137)とみられる。彼女は「マルクス資本論の經濟學的分析を現在のアカデミック經濟學と比較し、マルクスがいわんとしていると思われることをアカデミック經濟學者にわかりやすい言葉で説明する」（『マルクス經濟學』邦譯1頁）ため『マルクス經濟學』（1941年）、『マルクスとケインズ』、『労働價值説』（第3部）等を書いて、「ケインズ理論がマルクスを補うに必要であるように、マルクス理論はケインズを補うに大いに必要とされる」（p. 145）と主張している。これらの著作を通じて彼女の企圖する長期動態分析のアウトラインはほぼ明らかのように思われる。

ハロッドは不完全競争の理論についてそうであったように、長期動態論においても彼女のよき競争者として立現われた。ハロッドは『動態經濟學への途』（1948年）において、彼の動態分析のアウトラインを提示している。彼は問題をすべて純粹理論の場において解決しようとする。これに對して、彼女は長文の書評『ハロッド氏の動態論』（第3部）において、「ハロッドの世界は連續的變化が時間を通じて進行するという意味において動態ではあるが、しかしそれは歴史なき世界である。またそれは政治なき世界である」（p. 156）とその非現實性を非難している。また彼女は積極的に長期動態分析は實地調査と統計的検討による歴史的な接近方法による經驗的法則の注意深い體系化に俟たねばならないと主張している。したがってハロッドがリカードに歸れの旗幟を掲げながらも、ともすれば短期分析に押し戻され勝であるのに對比すれば、彼女のそれはより長期的、動態的であり、より現實的であるといえるであろう。

ここで彼女の長期動態分析について一つの疑問を出しておきたい。彼女がマルクスの理論體系から價值論を追放し、これに替るに指數論をもっている點は正しい。しかし指數論の著るしい發達にもかかわらず、それはいまだに満足に行く解決に到達していないのであって、とくに長期の分析には問題を多く残している。こうした指數論の困難性について彼女はいかに考えるのであろうか。彼女は何等言及していないのである。

われわれは彼女を通して經濟學30年の前進を回顧してきた。30年前のマーシャル經濟學はすでに過去のものとなったことは否定し難いのである。それにもかかわらず、この間に經濟學の擧げてきた成果—不完全競争、計量經濟學、總體分析、動態分析—の萌芽がマーシャルの内に認められることもまた認められる。そうして、ロビンソン經濟學の背後に太い線を擧げているマーシャルの強力な構想を讀みとることができるのである。

（梅村又次）